



中村八朗

ある陸軍予備士官の手記

上巻

## 序文

丹羽文雄

これは戦争中、日本陸軍にあつた予備役将校の実態を描いたものである。職業軍人ではない一般シブリアンとしての予備役将校が、どのように教育され、それが戦場で如何に生きたかということ、作者は自分の体験をもとに綿密に追求している。

一人の予備役将校の歩いた運命的な足跡が、予備士官学校から戦場へ、そして敗戦後まで描かれているのだが、そこには予備役将校というものの人間的な問題が鋭く深く追求されている。その意味ではこれは戦場に懸命に生きた青年の魂の記録とも言い得る。

すでに戦記ものは数多く出版され、暴露的なものには食傷している。この作者はそれを避けて、素直に軍隊を見つめ、将校、下士官、兵というものの問題を考える。その中で、自分の体験した下級将校というもののかかわりから、特に戦場における指揮組織の人間的反省を重点として描いている。そ

これは戦場だけの問題でなく、人間社会の特に組織社会の問題としても考えられる。

この作者にとって、ぜひとも書きたかったものだろう。九年間に及ぶ長い軍隊生活の経験をよく生かした、読みごたえのある作品となっている。

ある陸軍予備士官の手記 目次

〔上巻〕

序 文	丹羽文雄	1
まえがき	.....	5
第一章	擬製弾	9
第二章	指揮の倫理	20
第三章	軍人精神	45
第四章	張子の将校	85
第五章	戦場に景色はない	135
第六章	日々是劣等感	179
第七章	南部仏印進駐	223

ある陸軍予備士官の手記

目次

〔下巻〕

第八章	シンガポール・スマトラへの道	5
第九章	アンダマン島の日々	45
第十章	スマトラの落日	77
第十一章	ムルディカの火	135
対談	わが戦争体験	249
	丹羽文雄	
	中村八朗	

まえがき

かつて戦争中、私は予備士官学校第四期生の予備役将校であった。小隊長、情報将校、仏語の通訳将校、そして中隊長等と転々として、いろいろな職務にもつき従って戦場も部隊も転々と変わって歩いた。戦後の捕虜生活を入れると、九年間軍隊で暮した。

そんな体験は部分的には小説の材料としていくつ公开发表もして来た。敗戦後のインドネシア独立運動にまきこまれて苦労したことは、『マラッカの火』として発表した。また戦場ものとしては『娼婦と銃弾』『女と兵隊』等の長編の他、いくつかの短編小説も書いて来た。

しかし今、戦後三十年以上も経たが、どうしても別の視点から私は戦争体験をまとめておきたい気持ちにかられた。昭和史の中で、戦争は大きな部分をしめる。その戦争の中で消耗品としてあつかわれた予備役将校のことはぜひ書いておかねばならないと思った。

すでにたくさんさんの戦記や戦争小説が出版されているので、いまさらつけ加えることはないように見えるが、予備役将校のことをまともに書き残したものがない。

重い軍隊組織のしがらみの中で、下級指揮官として戦場の消耗品となった予備役将校の真実の姿を書き残しておきたいと思った。それは戦争史を考える上でも大切なことなのだ。それほど大上段に考

えないまでも、戦記小説に於ける将校の役割りはきわめて類形的になつてゐる。人間的な正当な役割は与えられていない。私にはそれが残念だった。指揮組織の中の消耗品として兵隊とともに黙々と散つて行つた何万人かの予備役将校はそれでは浮かばれない。そのためにも私は書いておかねばならないと思つた。

その方法として私は自分の体験をまとめて書くことにした。たくさんの予備役将校の体験をもとにまとめ上げる方法もある。それは一番いい方法でいずれやるべきことだと思つてゐる。しかし、軍隊組織の管理下で転々とさせられた私の体験は、予備役将校の使われ方としてはある意味で典型的なものだった。私は自分の体験をもとに綿密に指揮組織の実態を追求することにした。

私一人の体験をもとにしたものであるが、戦争をいかに考え、上層部の圧力と兵隊との板ばさみになる下級指揮官としてどのように苦しんだか、または、エリート現役将校達の下でどんな犠牲を払わねばならなかったか、兵隊に対する命令の実践者である下級将校としての人間的な苦悩などは、あらゆる予備役将校に通ずるものがあると思う。そんな意味で、私は自分を描くことで予備役将校というものを書いたつもりである。

だから一人の男の戦争体験の告白という形式の作品となつたが、戦場生活の中で懸命に耐え、明日の祖国を考えながら生きた一つの青春の軌跡でもある。私としては、やっと自分の戦争体験を思い残すことなく書ききつた気持である。

それにしても、三十余年昔の遠い記憶であるので、自分では正確と信じていても、事実に、あるい

それにしても、三十余年昔の速い記憶であるので、自分では正確と信じていても、事実には、あるい

は少しは差異があるかも知れない。だから、人物名等はすべて仮名にした。必要なことは真実がより鮮明に伝えられ得ればという思いである。

これはかつて予備役将校として戦った方がたにもぜひ読んでいただきたい。同時に、戦争を体験された方達、あるいは戦争を知らない人達にも読んでいただければ、どんなにうれしかたしない。そして、戦争の中で予備役将校というものはこんなふうに考え、生きて戦っていたのかと分っていたら、それに過ぐる喜びはない。大方の御批判をいただければ幸いである。

中村 八朗



〈対談〉

わが戦争体験

丹羽文雄  
中村八朗



中村八朗氏



丹羽文雄氏

## 戦場で感じたこと

丹羽　　そういう苦勞もあつたんだね。ぼく自身は、報道班員として従軍した経験はあるけど兵隊の経験はないし、軍隊という組織やその世界のこととはよくわからないんだ。だからぼくなんか兵隊に話しかけたりするときは、普通の一般人に対するような態度をとるだろう。「あのう、もしもし」というようなね。ところが、こんな調子では兵隊はいうことをきかないんだよ。その点、新田潤なんか軍隊の雰囲気とか呼吸をうまく呑み込んで、いかにも軍隊の命令口調でやる。そうすると、兵隊は「はいっ」といっていうことをきくんだね。ぼくは、それができなかったな。だから軍隊や軍人の世界には入っていけないかったよ。あくまでよそのものというか、やっぱり素人だったんだね。兵隊は、文字どおり兵隊になりきっているから、普通一般人に対するような話かけをされてもだめなんだ。もう受けつけなくなっている。ソロモン海戦に従軍したときなどは、ぼくは佐官待遇だったんだけど、それでも、軍隊や軍人ふうにはなれなかった。あれはだめだった。そうできないんだな。

中村　それはよくわかりますよ。陸軍でもわれわれ予備役将校、予備士官の悪口いうときは擬製弾というんですね。擬製弾というのは、兵隊に弾込めや弾抜きを教えるときに使う、火薬が入っていないやつなんです。

それに対して、士官学校は、本物の弾丸ということなんです、彼らはいま先生がおっしゃっ

たとおり、命令もピシャッときめつけていう。態度もいつもいぼっているし、怒るときもいかにも軍人らしい。われわれが考えると、同じ人間なのにどうしてこんなまでしてというような考えを持つんですが兵隊にしてみると、そういうほうがいいんですね。ところがなまじ予備士官のほうは下世話に通じているもんだから、つい優しくすると、何か頼りないと思うらしい。それで擬製弾だって馬鹿にされた。だから兵隊は、いばられて、引っ張られたいというような、何か妙な心理があるんですね。紳士的にされるとかえって戸惑っちゃうような……。

丹羽 結局、軍隊というのは個人の意思を放棄させてしまうんだな。

中村 そうなんですよ。兵隊になったら自分というものを捨てないといられませんからね。兵隊には何か、女が引っぱたかれた男についていくみたいなところがある(笑)。だから、将校をいばらせるのは、半分は兵隊にも罪があるんです。

ところで先生は、昭和十七年に、今度は海軍の報道班員として南方海域に行かれたわけですね。で、ソロモン群島のツラギ沖海戦に従軍される。後に第一次ソロモン海戦と呼ばれた戦闘ですが、それで負傷されるわけですね。

丹羽 そうそう。あの体験はものすごかった。あれはそうそう誰もが体験できるものではなかったろうな。

あの昭和十七年の八月ごろは、日本はまだ景気のいいころだった。ソロモン海戦でも第二次になるとだめだったんだな。アメリカがリーダーを使い始めたから。第一次のときはまだそれがなく

て、日本海軍得意の夜襲戦で勝ったわけだ。

あのおときは報道班員として、ラバウルにいた第八艦隊の旗艦である「鳥海」に集り組んだんだけど、海戦というのはどんなものか知らんし、なんか珍しいものを見るような気持で行ったんだ。そうしたらいきなりえらい戦鬨に巻き込まれたわけだ。

中村 そのときのことを描いた『海戦』を読むと負傷されたときの様子などは大変な状態だったやうですね。

丹羽 いや、すごいものだったなあ、あの夜戦は。不謹慎かもしれないけど、あれでこっちに弾が飛んでこないとわかったら、人に見せてやりたいようだったね。夜空に曳光弾が飛びかって青い火や白い火が飛んでまるで花火を見物しているようだった。照明弾が頭上いつまでももっていらしてね。大砲を撃つ音もものすごく、「鳥海」の主砲を一発撃つと軍艦全体が揺れるんだからね。とてもじっと立ってられない。だからぼくは艦橋にもたれて尻もちついてたんだ。ところが人間の運、不運はわからないもので、ぼくは尻もちついて坐っていたから助かったんだよ。立っていたら死んでいたよ。だって近くで立っていた連中は、みんな吹き飛ばされて死んだわけだから。

ぼくは、戦闘中、外で艦橋にもたれて見ていたわけだけれど、そこから二間ほど離れた艦橋の角に砲弾が当たったんだ。一瞬、熱風とともに砲弾の破片が飛んできた。パァーッと大きな力で殴られたような衝撃を受けた。でも意識は失わなかった。右腕の上膊部に砲弾の破片や鉄片がつきささっ

たのがわかったね。手でさわると固いものが入っているんだよ。血は思ったほど出なかった。灼熱の破片だから血管を焼き切って止血めにもなったのかなあ。そんなにいたらら血はでなかった。

で、すぐ軍医の治療を受けたんだけど、破傷風になるといけないというので、肉をそぐようにして、傷口のところをメスで切ったよ。たしか、麻酔の注射なんかしなかったと思っただ。でも興奮しているからそんなに痛くなかった。翌日になって、黄色のきれいな膿がでた。あんなきれいな膿が出るとは思わなかったね。それで、その後も治療を受けたんだけど、南方は暑いものだからなかなか治らない。それで、日本に帰って治療することになったわけだ。

中村 『海戦』は、いま読んでも記録文字としてもすぐれた作品ですね。

丹羽 ぼくは別に戦意を高揚するために書いたわけじゃないからね。そんな意図はぜんぜんなくて、自分の経験した戦闘のことだけ書いたわけだ。それがかえって、いま読んでもおもしろいんじゃないかな。あれが、なまじっか戦意高揚のために書いたのなら、まったく興味もわかないね。

中村 この作品は、昭和十八年に、第二回中央公論社文芸賞を受賞したんだね。第一回の受賞が堀辰雄の『菜穂子』。

丹羽 そうそう。昭和十九年に中央公論社が解散させられたから、ぼくの受賞であの賞は終わったんだな。そんなこともあって、あのとときの体験はいろいろ思い出深いんだけど、いまでも、砲弾の破片が首筋の中に入っているんだよ。もうすっかり脂肪で包まれているので大丈夫らしいんだけど、ときどき外側に出てきて、押すとぐりぐりしたものがあるんだ。米つぶぐらいのもだらうけ

ど、首すじに金属があるから雷が鳴ると恐いんだ(笑)。ここに当たると困るからね(笑)。

しかし、このときの体験は、当時は興奮していたからたいして気にもしなかったが、家へ帰ってきてよくよく考えてみると、実に恐いものだったなあと思った。夜、床について、ふっとあのときのことを思い出すともう眠れないんだ。寢床に起き上って、ああ、俺は生きて帰れたんだなとづくづく思うことがしばしばあったね。だって、すぐ目の前に四、五人並んで立っていた水兵たちが、一瞬、あつと思つたら、吹っ飛んでしまつて何も残さずに消えていたんだから。さっき言つたように、ぼくはしゃがんでいたから助かつた。生死はまったく紙一重の差だつた。

しかしまあ、ぼくの戦争体験はそれぐらいで、兵隊として長い間苦勞したということではないからね。その点、中村君はいろいろ苦勞していたわけだな。

中村 しかし、凝縮した体験では先生のほうがはるかに大きいですよ。

丹羽 いずれにしても、君の戦争体験が今度の作品となつて生まれてきたわけだから、その点から考えても、当時の体験そのものが、個人にとつてまったく無意味ということではなかったと思う。

中村 やはり、いま流行の言葉でいえば、自分の一つの原体験になっていますね。戦後の生き方、考え方にも相当影響を与えているように思うんです。先生の場合はいかがでしょうか。海戦で負傷されたりしたことで、やはり考え方とか、文学の上で何か影響がでているでしょうか。

丹羽 特に文学とか考え方とかということではないんだが、人間の生死の問題について考えることがあつたな。ぼくはよく人から度胸がいいとか、うろたえない人間だとかいわれるんだけど、たし

かに自分じゃそれほど自覚していなかったが、人間の死についての覚悟ができていたんじゃないかと思う。ぼくの場合はやはり宗教に関係があると思うんだ。

中村 そうすると、あの海戦のときにもすでに、そういう覚悟のようなものが心の中にあっただけですか。

丹羽 はっきり意識していたわけではないが、人間の死ということに対しては、何か自分の心の中に用意されたものがあつたように思う。これはやはり、生家がお寺で、小さいときから人間の死ということにしょっちゅう接していたからかな。だから、死が突然に訪れても、そういう場面に臨んであまりうろたえることがないということは自分にもわかつていた。

中村 そうすると、特に戦場体験というものから、新しい何かを感じさせられたということはないわけですね。

丹羽 そう。ことさら新しい影響というものはないな。ただそれは、人によって、あるいは経験の質とか量によって異なるものかもしれないが。しかし、ぼくの場合は、生命に限らず、永久不変なものはないという考え方なんだ。生命にしろ、思想にしろ、社会体制にしろ恒久的なものはないと思ってる。だから、ぼくはいつの時代でも、どんな状況におかれても、次にはまた違った時代や状況に変化していくんじゃないかと思いつながら生きている。それがぼくの思想だよ。それはやっぱり宗教と関係があると思う。

中村 たしかに、人間というのは過去を引きずって生きているわけですから、ある時期急に変わる

ということはないですね。だから考えてみるとあの戦争というのは、私にとって青春の一時期の通過地点だったように思います。戦後の生活も含めてその延長が今日につながっているというような感じですね。たしかに、先生の場合は小さいときから、人間の生命が一瞬にして崩れることがあるということを経験されているけれども、ぼくなんかは、そういう人間の脆さというか、はかなさというものを戦争の体験から非常に強く感じましたね。まあそういう違いはあるんですけど、根本的な、人間に対する考え方とか、思想的な根底になるようなことはあまり変わってないですね。ぼくの場合も長野の善光寺のそばに育って、親戚にお寺の関係者もいたものですから子供のときからお経をあげさせられたりして、多少宗教に縁があるんです。ですから、先生の死生観についてもわかるような気がします。

ただ、ぼくの場合はなかなかそこまで悟れなくて、部下が死んだりしたときは、気持の上で非常につらかったですね。戦死した兵隊を茶毗に付すときなどは何ともいえない気持になりました。士官学校では、決死必勝の精神でやれと教育されたのですが、実際の戦場ではそんな教科書どおりはいかない。だれもがやはりできるだけ部下を死なさないような方法をとりましたね。



なかむら・はちろう

大正3年長野市生まれ。

昭和13年早稲田大学仏文科卒。早稲田高等学院時代より丹羽文雄氏に師事。

昭和15年盛岡陸軍予備士官学校卒。以後、中国、仏印、マレー、スマトラ島等での作戦に従軍。昭和22年復員。

復員後、作家活動に従事。

〈主な著書〉

『マラッカの火』(北辰堂)、『娼婦と銃弾』(講談社)、『聖女の領域』(主文館)、『高校卒業前後』(河出書房)。

ある陸軍予備士官の手記 下巻

著者——中村八朗

発行者——徳間康快

装幀——駒井佑二

印刷日——一九七八年八月三一日

発行日——一九七八年九月一〇日

印刷所——ミツワ印刷・真生印刷

製本所——ナシヨナル製本

発行所——株式会社 現代史出版会

東京都港区新橋四一〇一—  
電話 四三一・二一四九 郵便番号一〇五

発売——株式会社 徳間書店

東京都港区新橋四一〇 郵便番号一〇五  
電話 四三三・六二三一(代)  
振替 東京四一四四三九二